幼児の教育　第95巻　第８号　平成８年８月１日（毎月１回１日発行）昭和23年４月15日第三種郵便物認可　ISSN0289-0836

幼児の教育

'96 8月号

家庭―保育所―幼稚園

お茶の水女子大学
平成
8. 7. 17
図書館

第95巻　第８号　日本幼稚園協会

この実践どこがポイント

◆全3巻◆

新刊

①子どもが変わるとき

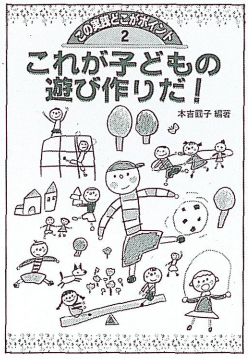
－本気で子どもとつき合っていますか－

②これが子どもの遊び作りだ！

－子どもの素晴しい発想を見逃していませんか？－

③これが子どもの生活作りだ！

－生活に必要な経験をさせないでいいのですか？－



- 本吉圓子先生の提唱する生活保育論決定版。
- 全国各地の実践から100例をとりあげ、テーマ別に問題点を探っていきます。
- 実践例とポイントの解説により、子どもの見方、対応の仕方を学べます。

本吉圓子　編著

B６変型判　各248頁　定価各1,500円（本体1,456円）

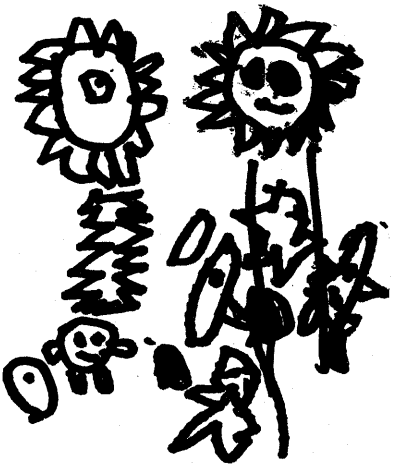
キンダーブックの

フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育

第95巻　第8号

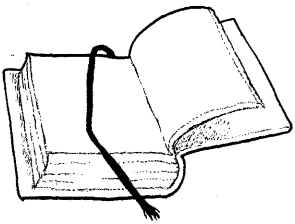


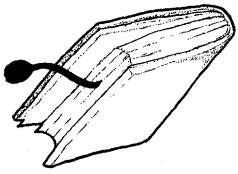
幼児の教育　目次

——第九十五巻　第八号——

二十一世紀にむけて幼児教育を考える(5)
保育の中での「疑惑」と「試行」……河邉　杲…（4）
子ども時代の空間体験……津守　真…（7）
お茶の水女子大学附属幼稚園長を終えて……島田　淳子…（14）
特集〈緑蔭図書紹介〉
『海・呼吸・古代形象』……吉増　克實…（18）
大人歴二十五年、少年少女からのメッセージ……友定　啓子…（21）
西脇順三郎の詩……彌永　信美…（24）

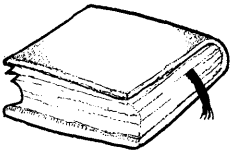
© 1996
日本幼稚園協会

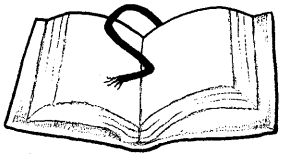




激動の時代を生きた女性たち……牧野カツコ…（28）
親子……そして教育……鈴木みゆき…（32）
怒れる子どもたち……矢萩　恭子…（36）
トポスにおける発達　第九回　環境の探索としての移動……無藤　隆…（41）
ある日の育児日記から(68)……佐藤　和代…（50）
保育の窓(3)　幼稚園の現状と諸問題……原口　純子…（51）
お昼寝中の研修会……永野むつみ…（58）

表紙絵・いわむらかずお「なにかありそうだ」
扉題字・津守　真
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット・彌永たたえ「ほこりっぽい書庫」
編集委員・田代　和美／伊集院理子・高橋　陽子
編集部・仲　明子

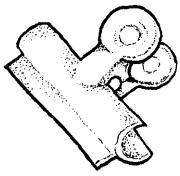




二十一世紀にむけて幼児教育を考える(5)

保育の中での「疑惑」と「試行」

河邉　杲



最近、幼稚園の保育実践の場に立ち会ってきて、数年間の研修の積み重ねと保育者の方々の成長過程から、今まで保育の実際の中で見過したり、軽く見・考えることしかなかった点に触れることができ、数々の反省もし改めて、その意味の重大さに驚きを感じている。その中の一つに保育の実際の中で「疑惑」とでも言った方がよいような「何だか変だな」という直感的感覚的なものが余りうかがえないことと、持たれてはいるが、ある時点で切り換えられて終っているのではないかということがある。保育の場では、保育者自身が、特に担任の子ども一人一人について話されも

する。例えば「主体的な態度や自主性・自発性を育ててきているつもりでいたのに担任に伺いを立てる言動が目立つ、これは真に自発性が育っていないのではないかと思うがしかし一方でまだまだ保育者への依存的な要求が強いようにも思える」など、実に矛盾をも感じるような思いを述べられるのに出会う。しかし、この素朴な思いのところが何時の間にか「どうして、この子はこのような行動をするのだろうか」「実際にはどうすればよいのか」などと、その因果関係的な課題に集約されたり、また方法技術的な課題に置き換えられてその追究に努力されてきている。「どうして」「どうすれば」という分析的な解明にのみ短絡的に没頭されてしまうのかが私には不思議でならないのである。ロジカルなものは、そのリスクを少なくするためには分析的に、コンピューターを駆使して究明していけばよいと思うが、保育の中での保育者と幼児ひとりひとりとの関係で起こっていることとそれについての保育者の極めて個人的な思いは極めてノンロジカルなものが多い。「感じる」世界のものを短絡的にロジカルなものとして解明していこうとするところに無理があるように思う。

ある時はとまどって立往生することも、息をひそめて様子をうかがったりすることも当然起きるであろう。ある子どもについて、近づき過ぎているのであれば少し離れて、時間を置いてもみるであろう。また離れ過ぎと感じれば近づいたり声をかけてみたりしてその反応を見、それをまた感じとるであろう。この動的な過程で相手自身を把えみなおすこともあろうが最初に感じた保育者自身の自分の感じとり方をも動いたり止まったり足を出したり手を出すなどの中で心と身体で確かめていくことが本来的なことではないかと思う。そしてその心と身体の動きや子どもの心や身体の動きを感じとったあるがままを記述して客観化したり

またそれを他人に聴いてもらったり読んでもらってコメントを貰ってさらに保育者自身の姿勢や考え方などを深くもし、拡げても行くそのプロセスこそ保育そのものではなかろうか。この過程の動きそのものを「試行」といってもよいと思う。このように考えてくると、子どもの成長に対するリスクを少なくするためのロジカルな面の他にいまひとつのノンロジカルな感ずる力のとても重要なことをあらためて強く感じる。そしてこの直感的・感覚的なものはトレーニングしなければ本をよんだり講話をきいて身につくものではない。

以前から「保育は計画的・意図的・効果的でなければならない」と指導されつづけてきて、そのように考え、それをそのまま実践されてきた経験者が多い。未だにそこから抜けられないでいる方も多いように思う。しかし幼児への援助をつぶさに見ると、意図的、効果的にはとても行かず、臨機応変に対応せざる得ないことの方が多いこと、また多くなってきていることは心ある方は充分感じられてきているはずである。

この臨機応変に対応できる力はノンロジカルな感じる力であることも明らかであろう。

はじめに提示した、はじめて出あった幼児との対応の中で素朴に感じられたものを短絡的に疑問や課題にしてしまわないで感じながら試行し、試行しながら感じて省察を加え保育の実践を進めて行かなければならないように思う。

なにか根本のところ、本質的なことがもっと手近なところに残っていて、それは矢張り、保育の実際を実際としてあくまでも実践を通して研修していただかねばならないのではなかろうか。

私はこれを今日的課題とは言いたくない。二十一世紀に向かって生きていく道そのものであり一つの仕事そのものであるから。

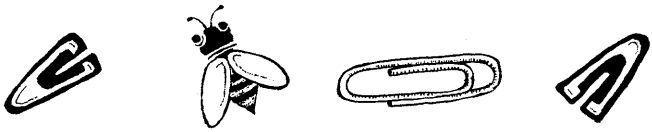
（元洗足学園短期大学）

子ども時代の空間体験

津守　真

上を見る―下から上に登る斜面の空間―希望を生み出す空間

T夫は登園すると私の手をつないだ。庭に歩いて行き、庭の片隅でうずくまり、うーと低くうなるような声を出していた。私は何かすることがありそうに思いながら、一緒にじっとしていた。T夫が三輪車に関心をもっているのが分かったので、それを近寄せた。T夫は自分の手で車輪をいじりはじめた。そうするうちに彼の心が解放されて、上方に向かうゆとりができたのだろう。急に滑り台の下から上を見上げて登ろうとした。私はお尻を支えて上った。T夫はしっかりと手すりにつかまって上る。上までゆき、滑り降りようとしたがひとりではこわいらしく、私の身体の向きをあちこちにかえて、どうやったら私にうまくつかまって滑れるかを試みた。私は先

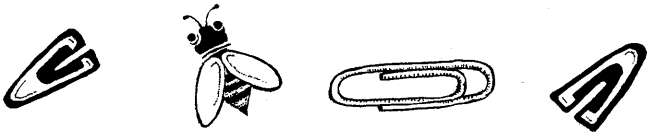


に滑り、T夫は私の首にしっかりつかまってゆっくり滑りおりた。滑り台を下から登っては私につかまって滑り降りるのを十数回も繰り返した。終わり頃には、もう私の首につかまらないで、足の先が私の背中に触れるだけで滑った。手には登園したときから持っていた小さなプロペラをしっかりと握っていた。何度目か上ったときに、そのプロペラを滑り台の上から下に放り投げた。彼は手を放すのにも、意志的に強く放すのである。

プロペラはドライエリアの溝の中に落ちた。自分では取りにいかれない遙か下の空間である。するとT夫はうーとうなって動かなくなった。私が下からそれを取って来るとまた動き始めた。この日の午後、別の子どもと肩を並べて、同じ場所でミニカーや電車を他の子が持って行っても怒らなかった。

この場面で子どもは自発的に動き始めた。そこに現れた結果としての行動は小さなものだが、この保育の過程の中にこの子ども自身の成長の姿が現れている。子どもが低い声でうなっているときには、目は下を向いている。おそらく子どもにとっては何に手を出して良いかも分からないし、何にも手が出せなくて、閉じ込められた空間の中にいて、目を上に向ける余裕もなかったのだろう。三輪車の車輪を回しているうちにーこの子は回るものが好きであるー子どもの心は解放されて上方に目を向ける余裕ができた。子どもは外に向かって広がりゆく空間があることに気が付いた。

子どもが滑り台を下から上に登ることに関心を示したとき、上方の空間を発見し、



未来の時間を希望をもってみるようになったと言えよう。

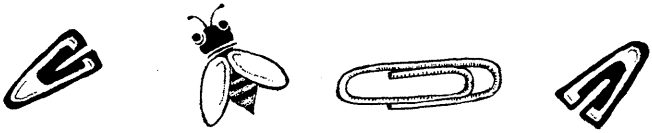
人間の空間は身体と深く関係している。前、後、上、下、左、右は、直立した身体を基準にしている。そのことは時間とも関係するし、人の感情とも関連する。前進する方向は未来を指し示し、前の上は、希望の感情を伴う。前の下は墜落する淵であり、前進に伴う不安である。後は自分が歩んで来た道であり、過去のさまざまな感情を伴っている。

日常的観察

日常の空間では私共は平面の上を歩いている。

歩くとき、人の目は、目的に向かって前方を見ている。目的に向かっているときには道が多少上り坂でも下り坂でもほとんど問題にならない。自動車を運転する人は歩行者よりももっと目的に直線的に向かうから、斜面は一層問題にならないだろう。目的なく散歩するときには、道端の景色やわずかの坂道もその本来の姿をあらわす。坂の上の空は明るく、坂下の屋根は暗く見える。上り坂をゆくとき、歩くのに困難があっても頂上に到達する楽しみがある。

物思いに沈んで自分の問題にとりつかれて歩いているときには、空を流れる雲、輝く青空に気が付かない。一息入れて空を仰いで見れば、空は高く無限に広がっていることに気が付き、自分が何と小さなことにとらわれていたかを思い知らされる。私は



ある時期、自分の問題にとらわれて過ごしていたとき、ふと、このことに気が付いたことがあった。詩篇にも「われらは火の中、水の中を通った。しかしあなたはわれらを広い所に導きだされた」と言っている。上を見上げるとき世界は広くなる。

足の下の空間は地面で埋まっているから、空とは違って下を透き通して見ることができない。ところがあるときに突然足元の地面が割れて、すぐ目の下に絶壁の底が見えたとするとどうなるだろうか。そのときには目がくらみ、下に落ちないかという不安におののくだろう。そういう上と下の空間に気が付いたとき、子どもの空間が広がったといえる。

いま、T夫は滑り台で上に登っていこうとした。私は子どもがしようと思っていたことを助けたいと思い、お尻を押して上った。そのときこの子の閉ざされた空間は上方に向かって開けたと言えるのではないだろうか。

言語による認識

上、下、立ち上がる、倒れる、上昇する、落ちるなど、言語の基礎には、身体感覚での上と下の体験がある。これから転義して、精神の世界における言語がこれにあてはめられる。天国と地獄、希望と絶望、いずれも身体感覚における上下の感覚と関連がある。天国は上にあって地獄は下にあるということは、だれもほとんど疑わない。現代の人は天国、地獄の存在を信じないけれども、しかし上と下という言葉に伴って

上の方は明るい希望、下の方は底知れぬ不安を表すことに変わりはない。

社会生活においても、われわれは上の立場に立つということを言うし、上の立場に立つと何か偉くなったような気がする。本当はそうではないのだが。高いところに登り過ぎて降りられなくなることドイツ語でVerstiegenheit（うぬぼれ）と言う。Stei-genは登ること、Versteigenは「登りそこなうこと」、高いところに登り過ぎて降りられなくなるという意味である。身のほど知らずということばは、自分が本当は登れないところまで登ってしまって、そして降りられなくなってしまうことだとボルノウが「人間と空間」の中で指摘している。子どもは自分の力で登れた所は自分で降りることができるが、登りたいからといって大人が支えて登らせたときには危険が伴う。自分の足で登れるところは自分で降りることができるのである。

発達的観点

赤ん坊はいつ上を仰ぎ見るようになるだろうか。子どもが寝ている状態から膝まずいて、そして立ち上がるようになったとき、子どもは自分の身体を基準にして上と下の空間を分化して認識する。赤ん坊が立ち上がった時に、自分の顔のあるほうが上で、しりもちをついて倒れる方向が下である。これは体の動きと一緒にできあがる上下である。歩いては転び転んでは立ち上がる時に、子どもは一生懸命に上と下を勉強している。そして二歳くらいになると、すっかりそれは自分の身についたものにな

る。

二歳位になると、子どもは滑り台の下から上に登ろうと思う。そう思うときには登る前から子どもには上方空間が観念の中にできている。「うえ」「した」という言葉はまだ意味をなさなくとも、上に登ろうと思う気持ちは明瞭で、子どものなかには身体の水準で上下のイメージができている。三、四歳になると、限られた平面で上下の空間のイメージが生じる。子どもは画用紙の線を基準にして上と下を認識するようになる。上に太陽を描き、下の方には地面を描き、その中間に人間を描く。明らかに視覚の面で、上と下とその中間が子どもに認識されたことが分かる。

子どもの観点から空間をもう一度考え直してみる。幼児の段階では言葉の転義はあまり意味をなさないだろう。言葉を持たない点で、子どもは大人の精神の世界とは違う。しかし身体の感覚での上下は、大人よりももっと生々しく体験されているだろう。大人はそれを言葉に置き換えてしまうから、観念的になって、上は希望、下は絶望というように簡単に観念化するが、実は希望とか絶望というのはそう簡単なものではなく、自分の全生活が本当に明るくなったり暗くなったりすることである。子どもが上方空間を身体感覚で仰ぎ見るときは、天にまで届く高揚した感情があり、下と言うときは地獄の縁をのぞきこむ目の眩むような恐ろしさを感じるにちがいない。

つまり、大人が言葉で考えることは、子ども時代の身体感覚による空間体験が下敷

きになっている。言語以前の子どもの生活に精神生活の芽生えがすでにある。子どもは身体の直接感覚によってもっと生々しく人間の現実を仰ぎ見、またのぞき見ているのではないか。

私は自閉的な子どもを見ていてそんなことをしばしば思わされている。滑り台の斜面を登るという小さな行為を、子どもが自発的にするようになったとき、子どもの心には、上方へ、そして未来への明るい希望が生まれて来たのだと言ってよいと思う。そして自分の大好きなプロペラを上から下に落として、手の届かない溝の中に入ったとき、大人が考える以上に子どもは落胆と後悔の中にいるだろう。子どもが落とした物をそんなに親切に取って来なくてもいいのではないかという考えもあるが、自分自身の身代わりともいえるような大事なプロペラを落としたと考えたとき、私は拾って来ないわけにいかなかった。そうしてよかったと思う。この後、この子の世界は急速に開けていった。

子どもが滑り台を下から上に登ろうとするとき、その世界は未来に向かって広がろうとしている。私共はそれを手掛かりにして保育を進める。それはこの子どもに限ったことではない。同様の観察は数多くある。

（愛育養護学校）

お茶の水女子大学
附属幼稚園長を終えて

島田　淳子

三月で園長を終えた。とは言え実感はまだない。美しい園舎も園庭も、そこで遊ぶ園児達の姿も先生方の笑顔も、何もかもまだ私の頭の中でゴチャマゼになって躍動している。さまざまな体験が整理され、フィルターにかけられて思い出として定着するまでにはまだ相当時間がかかりそうである。

というわけで、本稿は表題から感じられるような園長生活の総括などと言うものではなく、編集者のお言葉に甘えてとりあえず心に浮かぶことを記すものであることをお断りしておく。

三年間に得たものはたくさんあるが、その大きな一つは私にとっての幼稚園の先生方である。三年前までは単にお茶大職員録に記された活字でしかなかった先生方が、今では一当たり前と言われ

ればそれまでだが一血もあり涙もある生きた人間である。それどころか、皆それぞれチャーミングで私の心を捉えて離さない。

なぜだろう。何が私の心をこんなにも打つのだろうと、自問自答してみた。答えは、理想の保育をあくまでも具現しようとする、先生方のごまかしのない真摯な態度にあることに気づいた。御承知のようにこの幼稚園は、ひとりひとりの個性や発達段階に応じた自発的な生活を尊重しつつ、子どもの能力や情操を養うことを保育の理念にしている。しかし、一人の教師が三十五名の園児を受け持つ現在の体制の中で、この理念を実現するのは極めて困難である。保育の本質を考えれば考える程、ほとんど不可能ではないかと思えてくる。こんな中で、決して手を抜かず、その日の保育における問題を提起して話し合い、明日に備えての環境の整備など、きめ細かに保育に立ち向かう姿に感服した。この思いは三年間に強くなる一方であった。

そんな先生方に、これらの保育の実践を研究として捉えてまとめることをお願いした。これだけ質の高い保育を世に知らしめることこそ先生方の使命であると思ったからである。今以上の負担をおかけすることを承知のうえでの、心痛みながらのお願いであったが、先生方は快くそれに応えて下さり、以前からの研究会がより活発になっている。

その成果が公表されるのを楽しみに待っている。

そうは言っても、保育の実践研究をまとめるのは容易なことではないと思う。私が行う食物科学の研究のように実験条件を設定することなどできないからである。私が関わった一例をあげてみよ

う。園には一か月に一度お誕生会というのがあり、先生方が全園児を前に劇をして下さる。ある時、劇の途中で先生方が扮する登場人物（動物だったかも知れない）が突然舞台を降りて、園児の方に近づいてきた。ぐんと近くなった園児との距離と同じ高さ。インパクトが断然違ってくる。園児はワーッと湧いて総立ちとなった。私は先生方のこの新しい試みに頭が下がる思いであった。

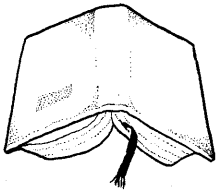
ところが一人、熱狂の外にいる子がいた。ぐっと歯を食いしばって、「立っちゃいけない」と叫んでいる。「立ちたい、立って見たい、でも立ってはいけない」という願望と自己規制を全身から発散させている。何といういじらしい自己規制だろう。こういう精神を皆が持てば、新聞の三面記事を賑わしている問題（見つからなければどんな悪いことをしても良いと思っているのではないかといつも思う）のほとんどがなくなるのではないだろうか。ともあれ保育者たる私はどうすべきだろう。他の子ども達を座らせることは不可能だし、その子を立たせてあげることは彼の心の根本にある正義感のような、何か大切なものを壊すような気がする。一瞬の判断ができないでいるうちに「立っちゃいけない！」と叫びながらその子が前の子を殴ってしまった。不正（と彼が思っていること）に対する怒りが限界に達しての暴力。顔を真っ赤にして涙をこらえている彼に、暴力はいけないなどとどうして言えようか。

一方、殴られた方から見ると天災が降ってきたようなものである。没我の境地からいきなり現実に引き戻された彼は、後ろ向きになり、「何もしていないのにぶった！」と言いながら相手にかかってきた。

もちろんこの二人、私が「あっ、おもしろそう！」と叫んで舞台の方を指したら、すぐそちら

に気を取られ、園長先生の椅子に二人仲よく並んで座って、大満足で観劇を続けたが。

以上はほんの一例であるが、多くの考えるべき材料を含んでいるように思う。あくまで立たなかった子をどう扱うかは、その子の個性や考え方によって異なってくるだろう。座って見ましょうという約束がどういう状況のもとで、どの程度の強制力をもって行われたかも考慮しなければならない。また暴力についても、とにかく暴力はいけないと単純に割り切れるものではない気がする。そうは言ってもあの状況の中で立ち上がってしまった子ども達を責めることはできない。ましてや意欲的な試みを取り入れて下さった先生方を責めることはできない（もっともこの話をしたらすぐに園児たちの席を工夫し、全員が見えるようにして下さった）。



いろいろ考えてみたがどうも一つの答えはないようである。継続的な保育の中で子どもを十二分に理解し、これらの蓄積を基に、その子の特徴やその日の状況などから総合的に判断せざるを得ないだろう。しかもその場での態度を瞬時に決める決断力が必要である。保育とは真の叡知と洞察力を必要とする大変な仕事であるとつくづく思う。

こんな大変な仕事に全力投球しつつ、研究成果を世に出そうとさらなる努力を重ねている昨日までの同僚達に、心からのエールを送ってペンを置く。

（お茶の水女子大学）

特集〈緑蔭図書紹介〉

『海・呼吸・古代形象』

三木成夫著・うぶすな書院

吉増　克實

読者は、巻頭の論文「母性の進化」をお読みになっただけでたちまち三木成夫の世界へ引き込まれるにちがいない。目次に目を通すだけでも、「仕事は息抜きの要領で」「海と呼吸のリズム」「〝いのち〟について」「内臓の感受性が鈍くては世界は感知できない」などなどの題名からこの本で繰り広げられる三木成夫の独自の世界を予感されることであろう。

三木成夫は一九二五年、香川県丸亀に生まれた。東京大学医学部を卒業後、同大学の解剖学教室に入り、一九五七年から東京医科歯科大学の解剖学教室に在職、一九七三年に東京芸術大学に移って、保健管理センター所長および生物学教授となったあとは一九八七年に死去するまでその職にあった。伝説的名講義で多くの医学生、芸大生を魅了したのみならず、その強烈な個性から発せ

られるオーラによって、出会った人々は、時にその後の人生が変わってしまうほどの強烈な「三木体験」を受けたと言っても言い過ぎではないであろう。正直に言えば、わたし自身もそのひとりなのである。そういうわけで生前から知る人ぞ知る人物であったが、遺稿が次々と出版されるにつれ、雑誌の特集で取り上げられたり、学際的な広がりをもった三木成夫シンポジウムがひらかれたりと、むしろなくなった後、ますますその影響が拡がりつつあるように思う。

生前に出版された数少ない著作のうち、中公新書からでた『胎児の世界』は比較的よく知られているが、三木成夫の多様な魅力がよりよく出ているのは、むしろ死後、雑誌や新聞に書かれた論文、講演原稿などをまとめて出されたこの本であろう。それというのも、(編者の名前がどこにも出てこないのを不思議に思われる方もいるであろう)これを編んだのが三木成夫の著作を出版するためにうぶすな書院を興し、三木成夫の死後は遺稿の整理出版を続けているうぶすな書院社主の塚本庸夫氏であり、氏の三木成夫に対する傾倒が、おのずと、三木成夫ならではの世界をこの本の中に現出させているのである。ちなみに、書名も、この本の魅力的な内容を象徴するかのようなカヴァーの神秘的なバリ島の夜明けの写真も氏によるものだ。

三木成夫の思想の魅力は、専門の比較発生学に基礎をおきながら、人体の構造の(しかけ、しくみでなく)「すがた、かたち」の意味を、あるいは人間の行動、文化あるいは病気の由来を、悠久の地球史的時間をたどりながら、それらが遠い「生命記憶」のいまここでのあらわれであることを教えてくれるところにある。たとえば、母なる海の中ではぐくまれた生命は、進化の途上、海を母胎の羊水として体の中に抱えて上陸した。「母なる海」とは単なる文学的比喩ではないのであ

る。またたとえば何かに集中するには息をとめなければならないわれわれの不自由も、生命の上陸に伴って、内臓筋（不随意筋）によって自律的に行われていた水中生活でのえらによる呼吸ができなくなって、本来は個体の移動のために使われる骨格筋（随意筋）を呼吸筋に代用しなければならなかったという生命史的事実と繋がるのである。三木は、生命形態の原型を、植物と共通する「栄養－生殖」をつかさどる植物性過程の内臓系と、それをとりまく「感覚－運動」をつかさどる動物独特の体壁系とからなるものと見て、それが地球史的時間の中で絶え間なくメタモルフォーゼを遂げていく様を描きながら、しかし、植物性過程の生命にとっての原初性根源性を説いてやまない。その場に植わったままで宇宙と交流する植物的な生から、そのままではみずからを養うこともできず、食物と異性を求めてさまよい歩く動物の生への変化の中で、「心」がどのような運命をたどることになったか。「動物の中でも最も動物的なもの」となり、理知と意志一辺倒になって心を見失いそうになっている人間にとって、生の充実、心の豊さを取り戻す道は、どこにあるのか。それはどうやら生命記憶の世界を取り戻すこと、「内臓感覚」を取り戻すことにありそうではある。『内臓のはたらきとこどものこころ』（築地書館）という著作もある。子育ても、われわれの意識もとどかぬ深さの中で、しかし確かにはたらき続けている生命記憶の世界と繋がっているのである。

自転しつつ太陽の周りを回りながら、地球は、四季のリズムの中を桜前線と紅葉前線との交代に彩られ、鳥は魚は食の相と性の相とのリズム的交代の中を、誕生の地と生長の地との間を渡り回遊する。三木成夫の世界では、森羅万象がリズム的に交響している。

三木成夫に関心を持たれた読者には、同じくうぶすな書院から出版されている『生命形態の自然

誌』『生命形態学序説』、また本年九月に出版予定の『ヒトのからだ』を是非お読みになるようお勧めしたいと思う。また、三木成夫の思想に大きな影響を与えた、ドイツの生命の哲学者、L・クラーゲスの著作『リズムの本質』（みすず書房）『性格学の基礎』『性格学の基礎づけのために』『人間と大地』（以上うぶすな書院）も、お勧めしたい本である。

（東京女子医科大学）

大人歴二十五年、少年少女からのメッセージ

宮迫千鶴『母という経験　自立から受容へ―少女文学を再読して』

山田詠美『ぼくは勉強ができない』

友定　啓子

大人を二十五年ほど体験してわかってきたことは、かつて読んだ物語にでてきた「悪い人」はみんな「普通の人」だということだ。たとえば、あのアルプスの少女『ハイジ』にでてくるこわいロッテンマイヤーさんは「普通の人」で、今も日常的に出会っている。自分はゼーゼマンおばあさ

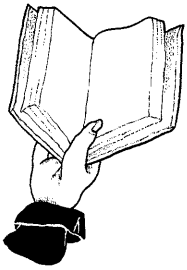
んのようになりたいと願うけれども、ロッテンマイヤーさんにならないとは言い切れない。

さて、今回ご紹介する作品は、大人を長年やってきて、ふと立ち止まりたくなってきた時の書物である。『母という経験』（学陽書房）の作者宮迫千鶴さんは人気エッセイストである。中年期にさしかかった作者が、かつて少女だった頃に読んだ名作物語を再読し、今の自分にとっての意味を語る。作品は『ハイジ』『秘密の花園』『小公女』『小公子』『あしながおじさん』『若草物語』『ふたりのロッテ』の七つ。これだけでも十分魅力的なラインナップである。たとえば、非の打ちどころのない理想的な子ども、『小公子』のセドリック。「よい子すぎるのも気持ちが悪い」、けれど「いま、私はセドリックが『天使』であっていいと思い直している。（中略）この世に長く生きて汚れた人間が、そういうものをもう一度、『天使』から学ぶことは幸福というものではないか」。

私自身の忘れがたいシーンといえば、赤毛のアンがギルバートの頭を石盤で思いきり殴るところ。この本を読みながらそれは少女の「誇り高さ」の象徴でもあると納得した。少女の「誇り高さ」と「やさしさ」を、作者は『小公女』のセーラの中に見る。一度「大人の世界」をかいくぐった人のための少女文学論というところだろうか。それにしても『赤毛のアン』がぬけているのが残念でならない。

『ぼくは勉強ができない』（新潮文庫）は劣等感を持った少年の、少し屈折したお話かなと思うと、さにあらず。他人様と同じ価値観を持たない高校生、時田君の青春小説。もっとも、これは堂々としたタイトルからも想像できたのだが。時田君には父親がいない。苦労がちっとも身につかない母親と祖父の3人暮らし。この点でも「普

通」からはずれている。しかし、この家族こそが時田君の愛と自信の源である。時田君の持っている生きる感覚の爽快さが、普通の親や教師が、子どもに守り与えようとしてもがいている価値観を、逆照射する。大人のたてまえに合わせて動く級友と一線を画す時田君は、感覚的で、思考的で、本質をつく。それゆえ「変わったやつ」と級友からは見られている。作者は言う。「私はこの本で、決して進歩しない、そして、進歩しなくてもよい領域を書きたかったのだと思う。大人になるとは、進歩することよりも、むしろ進歩させるべきではない領域を知ることだ」。



この春、私は巣立つ子どもの新しい部屋に寝転びながら、天井を見つめていた。ふと、何年も過ぎ去った日々が消えて、自分がこの部屋で希望に満ちた新しい生活を始めるような不思議な感覚にとらわれていた。我に返って、そうだ私は母親だったと少しがっかりしたものだ。考えてみれば、子どもと過ごしていた間、私は子どもというもう一人の人間の若々しい世界を自分も同時に体験していた。それは大人である私の、人間としての感情を支えてくれていたような気がする。幼稚園にいても同じようなことを感じる。私は大人になることのしんどさを、ここでしのいできたのかもしれない。一人前の大人になろうとして、なおざりにしてきてしまったことが、私にはたくさんある。おそまきながら大人になることの意味を考え直し始めている。そんな時期にこのふたつの本

に惹かれたのはたぶん偶然ではないと思う。

（山口大学）

付記

『母という経験』は一九九一年平凡社から出版されました。私が読んだのは、一九九五年に文庫化されたものです。

『ぼくは勉強ができない』は平成五年、新潮社から刊行されました、平成八年に文庫化されました。

西脇順三郎の詩

彌永　信美

この前、この欄に書かせていただいたときは、婚約時代の妻に教えられたヴァルター・ベンヤミンの『ベルリンの幼年時代』のことを書きました。それからもう五年以上も経って、今度もまた妻に教わった詩人のことを書こうと思います。結婚してまだ間もないころ、はじめて名前を聞いた西脇順三郎のことを。

妻が西脇順三郎の詩を最初に読んだのは、学校の教科書だったと聞きました。ぼくは、学校にあまりまともに通わなかったせいでしょうか、あるいは妻とは年がだいぶ離れているためでしょうか、学校時代にその名を見た記憶はまったくありません。でも、おとなになってはじめてその詩に触れて、かえって強く、新鮮な驚きがあったのかもしれません。

それからしばらく、西脇順三郎の詩集やその関連の本をいくつか買ったり読んだりしました。といっても、実際に読み、本当に好きになったのは、初期の『Ambarvalia』の中の「Le Monde Ancien」のいくつかの詩と、そして戦後すぐに書かれた『旅人かへらず』だったと思います。事実、それらが西脇の大きな詩業の中でも、一番簡明で、かつ最もポピュラーなものでしょう。

西脇順三郎といえば(きっと)誰もが思い出すあの美しい三行――「(覆［くつがへ］された宝石)のやうな朝／何人か戸口にて誰かとさゝやく／それは神の生誕の日」――「天気」と題されたこの美しい三行があるだけで、日本の詩は日本という狭い世界を突き抜けて、世界の中に、あるいは世界という陽の光の中に輝き出しているように感じられます。もちろん、人が思い浮かべるのは、地中海の陽光、おそらくギリシアの、あるいはエーゲ海の島のみずみずしい朝でしょう。ヨーロッパの曙……。けれども、ギリシアやヨーロッパと限定されない、もっと広くて輝かしい自然／宇宙の息吹のようなものも、ここには感じられます。

西脇順三郎の途方もない教養には、ただ驚嘆するほかありません。高山宏氏が、あるところで「われわれは二十世紀前半の知の巨人たちの巨大な業績を食い潰して生きているにすぎない」という意味のことを書いておられましたが、南方熊楠や西脇順三郎のようなひとたちの信じがたい研鑽を思うと、そのことが痛切に実感されます（若いころの西脇が、毎日「泣きながら」英語の勉強をした、ということを印象深く読んだ記憶があります）。明治以来の日本の文化の大きな部分は、西欧への憧れによって成り立っていたと言えるでしょうが、南方や西脇は、そうした「憧れ」という「対他性」のようなものを一気に払いのけ、ヨーロッパ的教養の最も高い部分を自分自身のものとして生き、それによってまさに「世界」という広がりの中にみずからを置き、あるいは飛翔することができたのだろうと思います。

西脇は、イギリス留学とヨーロッパ体験から『Ambarvalia』という結晶のように、夢のように美しい作品を持ち帰りますが、それから世界大戦という暗い時代を経、武蔵野をはじめとする東京近郊の雑木林での長く孤独な散策を経て、もう一つのすばらしく美しい作品『旅人かへらず』を発表します。これは、たまたま単行本になっているのを見つけてもっていますが、これほど「一冊の本」として読むことが重要な本は多くないでしょう。これは「はしがき」以下、一から一六八までの番号を振った短章から成り立っていますが、単行本ではその一編一編が新たなページから書き始められています。中には二～三ページにわたるものもありますが、多くは三～四行、そしていくつかはたった一行の断章です。「西脇順三郎詩集」のようなかたちであとから編まれた詩集だと、一行や二～三行だけのために一ページを費やすことはありえないのですが、単行本では、ページをめくるごとに、ほとんど真っ白なページに、

「窓に／うす明りのつく／人の世の淋しき」とか、「自然の世の淋しき／睡眠の淋しき」、「かたい庭」、「やぶがらし」という短いことばが目に飛び込んできます。真っ白なページの右端にわずかに印刷された「かたい庭」という四字がこれほど人の心を打つ、ということ。これは、詩集というより、一つの究極の「本造り」、「本という物」造り、とも言えるでしょう（あるいは詩集という「物」はそうしたものであるべきなのかもしれません）。

この短い詩集の中に、何度「淋しき」ということばが出てくることか。そしてそれが白いページの中で、なんと深く心にしみ入ることか。この淋しさは（高見順は、それを「存在自身の淋しさ」と表現しているということですが）、ぼくには、瞬間の淋しさ、と感じられてなりません。あるいは「時間の淋しさ」と言い換えてもいいかもしれません。どんな一瞬も一瞬のうちに過ぎ去り、消え去っていく淋しさ。大切なもの、一生忘れられないもの、と思われた途端に、その一瞬は消え去っているでしょう。あるいは消え去っていく淋しさを感じた途端に、どんな一瞬もかけがえのないものと感じられ、そしてそれは否応なしに消え去っていくでしょう。そうした瞬間は、春夏秋冬、四季を通じて散りばめられているでしょうが、ぼくには春の淋しさ、花が咲き出した瞬間の淋しさほどの淋しさはないように感じられます。けれども、この詩集の驚くべきところは、そうした「時間の淋しさ」を、いわば（ページの中の）「空間の淋しさ」の中に移しかえ、一冊の本として、物として、凝固させているところにあるのかもしれない、とも思います。

こうした「淋しさ」は、あるいは物や時間にしがみつこうとする一種の所有欲の強さからくるのかもしれません。それは感傷であり、弱さなのかもしれない——。この理解が正しいかどうかは分

かりませんが、でもぼくは、そうした弱さを含めて、ぼく自身がこの詩集に限りなく共感するように感じています。

とは言っても、すべてを措いて美しく感じるのは、『Ambarvalia』の、たとえば「……静かな庭が旅人のために眠ってゐる。／薔薇に砂に水／薔薇に霞む心／石に刻まれた髪／石に刻まれた音……」（「眼」）というような、硬質の、強く、光輝くことばです。いつか、扉のページに「薔薇に砂に水／薔薇に霞む心」というエピグラフを刻んだ本が書けることがあるだろうか、というのが、ぼくの「夢のように美しい」一つの夢想です。

（文筆業）

激動の時代を生きた女性たち

牧野　カツコ

夏休みは、どっしりした本を読むのに最適です。読みごたえのある本を三冊、ご紹介したいと思います。いずれも、近代から現代の激動の時代を生きた女性が主人公のノンフィクションです。それぞれ中国、韓国・朝鮮、ヨーロッパがその背景ですので、もしも三冊を全部読まれるなら、世

界や歴史を多面的にみる事ができると思います。日本人にとっては、学校の授業や受験勉強での歴史ではまったく学ばなかった事実、新聞やテレビなどからも知ることのできない歴史を知る驚きと感動があります。そして何よりも、すさまじい激動の歴史の中を生き抜いた女性達の知恵と強さと美しさに圧倒されます。

一冊は、もうお読みになった方も多いかも知れません。ユン・チアン　土谷京子訳『ワイルド・スワン』上・下（講談社）です。

中国人である著者の祖母、母、著者自身の三代にわたる女性の物語。この物語の背景は、清朝末期の二〇世紀初頭から日本が支配した満州国時代、中華人民共和国の成立、文化大革命の時代と続く、まさに激動の時代です。著者によれば「異常な時代と異常な社会」であり「とほうもなく残酷な時代」でした。この残酷な時代の流れの初めには日本軍の満州侵略などがあり、隣国の日本と無関係ではありませんが、毛沢東時代の中国については、西側の人々にはこれまであまり知られていませんでした。「人々が恐怖におびえて口を開かなかったこと」と情報が国家によって統制されていたことによりますが、とりわけ文化大革命の異常な時代については、この本で初めて知ることばかりで、本当に衝撃の連続です。

書名の「鴻」（ワイルド・スワン）とは、著者のお母さんの名前ですが、物語の大半が、すさまじい時代を生きぬいてきたこの母親の人生を描いたものとなっています。異常な時代のなかで人間がいかに残酷になり得るかを知り戦慄を覚えるとともに、異常な時代に翻ろうされながら、極限状況のなかで、なおかつ崇高な人間性を保ち続けて生きた「鴻」や著者の父親たちの勇気と美しさに感動の涙がとまりません。訳者の土谷京子さんも書いておられるように、これほど残酷で苛酷な時代を描いているのに、本書の全体は「人間の精神

に対する希望と信頼」が描かれて、「あたたかく、すがすがしい」のです。

著者のユン・チアンはロンドンに移り住んで十年以上が経ち、この本も英語でアメリカとイギリスで出版され、多くの国で翻訳出版されてベストセラーとなっているものの、中国ではまだいまのところ出版される予定ではないとのことです。毛沢東時代の「恐怖」の事実をこのようにありのままに伝えられる時代となったことをうれしく思うとともに、お母さんが中国の成都に健在でおられるということを喜ばずにはいられません。歴史の遙かかなたにおこったようなできごとは現代のできごとに他ならないのです。

次にお薦めの一冊は、角田房子**『閔妃暗殺―朝鮮王朝末期の国母―』**（新潮社）です。韓国の人なら誰でも知っている閔妃（ミンピ）暗殺事件を描いたノンフィクションで、第一回新潮学芸賞を受賞した本です。李氏朝鮮王朝末期の、こちらも激動の時代を生きた王妃は一八九五年（明治二十八年）日本人暗殺者集団の手により殺害され、四十四歳の生涯を終えています。戦後五十年を経て未だにぎくしゃくとしている日韓関係の近代史を知るために、ぜひとも読まねばならぬ本ともいえます。

韓国の人ならだれでも知っているというこの閔妃暗殺事件について、日本人はほとんど学ぶ事がありません。今や近くて安い観光地としてソウルへ多くの日本人が押しかける時代となりました。ソウルの中心にある景福宮には、日本人観光客は必ず訪れますが、官庁街の大通り世宗路の突き当たりにある景福宮の正門――光化門は、日本人暗殺者集団が閔妃を暗殺するために乗り越え、なだれ込んだ門なのです。広大な景福宮の中に「明成皇后遭難の地」と書かれた石碑があり、王妃が日本人暴徒の日本刀を肩に受けた血まみれの姿の絵があり暗殺の現場を示しています。私は二年ほど前初

めて、韓国に調査の仕事で行く機会があり、景福宮を韓国のガイドの人に案内してもらいましたが、日本人にはその場所を観光コースから外していました。閔妃暗殺のことは、帰ってから教えてもらい、読んでおくべきであったと悔やまれたのです。

本書を読むと、この暗殺の背後に明治政府の意図があったこと、そしてその後の日本の急速な朝鮮侵略、日韓併合へと歴史が展開して行くことがよく分かるのです。著者の角田さんは、隣国である韓国へ実感の伴う〝遺憾の念〟を持ち、それを基とした友好関係、相互理解を深めて欲しいと述べておられますが、その通りと思います。

三冊目の本は、塚本哲也**『エリザベート―ハプスブルグ家最後の皇女』**（文芸春秋）です。ハプスブルグ王家フランツ・ヨーゼフ皇帝を祖父に、一九世紀末ウィーンで男爵令嬢と心中した皇太子ルドルフを父に生まれた皇女エリザベートの波乱に富んだ一生を描いたものです。最近ハプスブルグ家やエリザベートについて書かれた紹介書が、幾つか出版されていますが、この本は新聞社の特派員として、かつての大ハプスブルグ帝国の首都であったウィーンに住み、プラハを始め中央諸国、北イタリア、バルカン、ウクライナなど本書に登場する主要な都市を訪れた著者によるもので、ジャーナリストとしての冷静な目で、欧州の近代史を克明に描き出した大作です。なかなか読みごたえがあり、第二十四回大宅賞を受賞しています。第二次世界大戦は日本人は、日本の側から見た歴史しか学ぶ機会がないのですが、この本ではヒトラー・ナチス、スターリンの野望に翻弄される悲劇の都市ウィーンが描かれ、プラハ、ブダペストの動乱や、第二次世界大戦の悲劇を欧州の側から知る事もできます。

一度ヨーロッパを旅行してみると、あらゆる場所に今なおハプスブルグ王朝の影響力が残ってい

ることを思い知ります。ハプスブルグ家とは何であったのか、政治の真っただ中で巨大な権威と権限を行使してきたヨーロッパの王家や貴族の伝統や格式、そして帝国の崩壊と王家の没落の激動の中に生きた王女の生涯を知ることは、興味がつきません。

中国、韓国・朝鮮、そしてヨーロッパの激動の歴史を生きた女性の人生は、私たちの平和な日常とはあまりにも掛け離れているかも知れませんが、時代と国を越えて共通する人間の生き方に打たれます。お薦めしたい三冊です。

（お茶の水女子大学）

親子……そして教育

鈴木　みゆき

ここ数年猛暑の盛りは南の島に家族で旅行することにしています。青い青い空と溶け合うコバルトブルーの海を眺めながらただぼんやりと水と戯れ砂と遊ぶ（アブナイおばさん!?）一週間を過ごすのです。ところが、今年は我が家に受験生が出現し！　本人の自覚とは無関係に時の歯車が追い立てます。で、やむなく南の島はあきらめて、家で読書と決めました。が、悲しいかな書店にいっても目につくのは『教育』だの『親子』だのとワタクシ世界の本ばかり。小中学校のＰＴＡ役員を掛け持ちしていることもあって『学校』に対する〝目〟も厳しくなるばかり。そこで今回は燃える親心をじっくりと癒してくれそうな〈親子＆教育〉に関わる本を選んでみました。

まず最初はどーんと大きく構えて親のまた親の親＝ルーツの謎から迫って見ましょう。最先端の遺伝子研究から私たち日本人の親＝ルーツを解説した**『パラサイト日本人論』**（文芸春秋一九九五）はおなじみ動物行動学者竹内久美子さんの近著です。これまでも『そんなバカな！』（文芸春秋）『男と女の進化論』（新潮社）『ワニはいかにして愛を語り合うか』（新潮社・共著）などたくさんの著書があり、ヒトをはじめ生物の利己的遺伝子の野望についておもしろおかしく洞察していました。それがついに日本人のルーツにさかのぼり、しっぽの曲がったネコやらアイヌ、オキナワやら一夫多妻やらあちこち話をとばせながら古モンゴロイドと新モンゴロイドの混血である我々の今について語ってしまうのです。この著者のスゴイところは読み終えた後に「うん、そうかもしれない」と妙に納得してしまうところでしょう。もし、不幸にして竹内氏の作品にまだ出合っていない方にはぜひお勧めしたい『パラサイト日本人論』。きっと読んだ後しげしげ鏡を見て自分のルーツ分析をするとうけおいます。

次は遺伝子から創作世界にワープしてみましょ

う。親なるものを深く考えさせてくれるのは**『くまのアーネストおじさん』**（ブックローン　一九八三）シリーズでしょう。著者ガブリエル・バンサンのあたたかな目が各場面にこよなくちりばめられていて、大人も泣ける絵本の名作だと私は思います。今回はおしゃまなセレスティーヌがアーネストおじさんの留守中、おじさんの若いころの写真を発見したところから始まる**『ふたりでしゃしんを』**を挙げておきます。おじさんを独り占めしているつもりだった彼女がすねる可愛らしさ。「私ととった写真、一枚もないわね」ときちんと言える健気さ。そしてそれに応え、町の写真館で二人の写真を撮るアーネストおじさんの優しさ、器の大きさ。血なんてつながらなくても親子は存在すると改めて思わせる私が大好きな作品です。それにしてもどうして海外には両親の別居や離婚、そして血のつながらない親子を正面からきちんと描いた作品が多いのでしょう。『二人のロッテ』や**『こねずみデジレのふたつのいえ』**（金の星社）は幼児～小学生向けの作品ですが、三年前、パリの本屋さんで「La séparation」というボードブック（どう考えても3歳児前後向けの製本）を見つけ、仰天したことがありました。それだけ両親の離婚や別居が日常茶飯事になっているということでしょうか。

さて現実に戻り、親となった以上考えざるをえなくなるのが子どもの教育です。一時ほどではない気もしますが、赤ちゃんが生まれると＊＊式だの××研究所だのからDMがわんさか来て親心をくすぐります。親だって頭のどこかでムダではないかとわかっているはずなのです。でも心は揺れ動きます。「もしかしたら…」「今やっておかないと」「後で後悔するよりは」…、そして教育の投資が始まるのです。私自身はここで早期教育について論じるつもりはないので、最近出た**『カラフルライフ』**（文化出版局　一九九五）を紹介する

にとどめたいと思います。この本は、ノーベル生理医学賞受賞の利根川進氏の現夫人で元NHKディレクター、現在はハーバード大学院生の吉成真由美さんの実践的教育論です。「だってそのほうが人生はカラフルに（彩りよく）なりますよ」という友人の言葉、遅咲きのすすめというサブタイトルからみても、著者がいわんとすることはおわかりいただけると思います。実際小学校の低学年で優秀そうに見えたお子さんが高校になると低空飛行というのはよくある話で、親が子どもの学ぼうとする意欲をつみとって先回りして教えても意味がないといえるでしょう。早期教育の弊害については『ミス　エデュケーション』（大日本図書　一九九一）の著者エルキンドも学習意欲や未知への関心がいずれ「バーンアウト（燃え尽きてしまう）」といっています。

結局親ができる教育というのは、前に出て指図したりゲキをとばすのではなく、環境としての受け皿を作ることなのかもしれないとこれらの本を読むと思うわけです。いくら親がやきもきしても、受験する本人になりかわれる訳ではありません。後ろで暖かく見守るゆとりが必要なのだと改めて感じました（私だって本当はそうしたい！）。吉成さんも著書の中でお子さんと接するとき「ちょっと前まで猿だったと思うようにしています」と書いています。ここまで長いスパンで物事を見られるならば、今、早期教育に狂乱している教育ママも、家庭の関係が崩壊して親子が別居している人も、少しは頭を冷やし、心静めることができるかもしれません。今年の夏は、縄文時代にさかのぼり、日本人なる探索から始めてみてはいかがでしょうか？

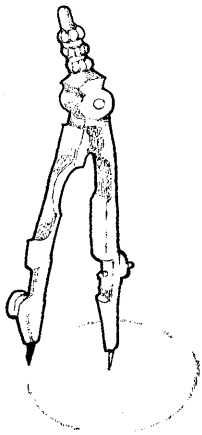
（聖徳大学）

怒れる子どもたち

矢萩　恭子

保育者である私は、混沌未知なる子どもたちとの生きた日常のなかで、実にさまざまな表情、素顔、行為、表現に出会わされ、立ち合わされる。どの人に対しても、同じように心を尽くし、身体を使い、毎日を少しでも充足した幸せな思いで満たしてやりたいと願う。とは言うものの、時に子どもたちは、容赦なく、混乱し、不安定となり、乱暴で激烈な嵐の如く、保育者である私にその存在をぶつけてくる。

じれる、いじける、泣き喚く、しがみつく、ひっくり返る、叩く、髪の毛を引っ張る、物を投げつける、癇癪を起こす、我儘の限りを尽くす、その場からいなくなる……等、怒れる子どもたちは、これでもかとばかりに、自己を主張し、保育者の日頃の理念やら信条やらといった概念に対してぎりぎりのところまで挑んで来るように感じられる。



数年前、三歳で入園してきた女児Eとの一年間は、〈強風、雨、嵐、嵐、ときどき驚くほど快晴、のち、雲行き怪しく雨、雨、嵐〉とでもいった毎日であった。Eは、園生活に馴染むのに大変な抵抗を示し、安定した気持ちで遊ぶようになるまでに長い時間を要した。朝は母親からなかなか離れられず、逆に帰りは帰りたがらず、保育者にしがみついたり逃げ回ったりした。絶えず保育者に「だっこ、だっこー」と要求してくっついていたが

り、少しでも保育者がEから離れると、狂ったように泣き叫んだ。人から言われたこと、人と一緒のことをするのをいやがり、わざと目立つことや周りの人のいやがることをしてみせる。しかし、私にはそんなEが、強風のなかで、自分の巣に帰ることも、木の枝に身を休めることもできずに飛び狂っている小鳥のように、はかなく脆い自我を抱え、保育者である私に助けを求めてきているのだと感じられるようになってきた。

九月のお誕生会を始めようというとき、私は、遊んでいた十七人のクラスの子どもたちに声をかけた。そのときEは庭で遊んでいたが、私の声に気づいてすべり台にいた女児が、Eを一緒に連れて来ようとしてくれた。そこからこの日のEの嵐が始まった。「Eちゃん、おへやにはいらない」「やだ、いかない」「だっこー」と喚き始めた。手に持っていたつわぶきをテラスに打ちつけ、犬声で喚いているうちに、自分が何がいやだったのかさえ、わからなくなってくる。ふと見ると、つわぶきの茎がぐにゃりと曲がってしまっている。それを見てますます悲しくなりわんわん泣きながら、私にしがみついて怒る。私も、Eの気持ちを静めようとあれこれ心を砕いてはみるが、この際E一人に掛かりきりになることもできない。子どもたちをトイレに行かせ、皆をお誕生会の部屋まで連れて行き、そして今日は会の進行という役割もある。結局私は、まだ泣きべそをかいているEを脇腹に抱えた格好でお誕生会に臨むことになった。

このあと、Eは、おべんとうまでずっと、機嫌が悪く、泣き続けていた。あまり大きな声なので、同じテーブルについた男児らが、「うるさい」と言う。私は、Eにあれこれと構うのを止め、ひととおり、皆の支度を見たあと、その場をフリーの立場の者に任せて、Eを他の子どもから見えないテラスへ連れ出した。Eを膝に抱いてしばらく一対一で無言で過ごすと、私は聞いてみた。「Eちゃん、どうして泣いちゃうの?」。このとき、答えが返ってきた。「だって、せんせいがむかえにきてほしかった」「そうだったの」。このことを私に理解してもらうと、ようやくEは落ち着いた。ほとんどの場合、激烈

な自己主張の仕方に気をとられて、適切にEの心を受け取るタイミングが合わずに、E自身も怒り狂い、泣き喚きながら疲れ果て、ますます自分がわからなくなってしまうことが多い。そんななかで、Eの言ったことが本当のきっかけか否かは別として、こうして気持ちをわかってもらい、満足でき気分も急速に平らかになることができたのは幸いであった。

Eの行動は、三学期に入って、落ち着きを見せるどころか、ますます激しさを増していくように思われた。少しずつ、大勢と一緒に過ごす園での生活の雰囲気に馴染み、他の子どもと一緒に遊ぶ面白さも体験し始めてきた一方で、これでもかという具合に自分だけを見ていて欲しがり、認めて欲しがり、応えて欲しがって、その為には思いもよらぬ激しい行為で自分の存在を誇示し、驚いたり、困ったり、考え込んだり、本気で叱ったり、といろいろな反応を示す私の態度のなかに自分自身の不確かな存在の手応えを見つけようとするかのようであった。

当時私は、自分のなかで、Eが激しい行為で示す気持ちの表出を〝激発〟と呼んでいた。激発を代表する行為は、保育室にある子ども用の木製の椅子を手当たり次第に投げとばす行為だった。椅子ばかりでなく、Eがパニックになると、絵本や、おもちゃも空を飛んだ。そして、私の足にしがみついて大声で泣く。靴が脱げてしまうと、靴にしがみついて泣く。泣き濡れて、消耗し、そして訪れる束の間の平静。次には、また混乱に満ちた激発が繰り返されるにしても、総体的に見て、Eの心は、安心を手に入れていくように感じられた。この頃になると、私には、Eが安心して暴れまくっているように感じられたのである。コントロールできない、自分のなかの得体の知れない混沌につき動かされているのではなく、安定を求めて止まぬ自分自身の意志と心で、荒々しい行為を周りの人間にぶつけてきているような感じがした。それも周りの人間への信頼と甘えがあってこそではなかったろうか。ある日、激発の場面のなかで我儘をぶつけてくるEに私は聞いた。「Eちゃんは、頭がいいから何かいい考えがあるんじゃないかな?」。すると、実

際、利発で、製作活動などでは独創的な表現力を見せるEは、答えた。「Eちゃん、このことだけはかんがえられないの」と。この瞬間に私は、激発すべくして激発しているEの意志をはっきりと悟ることができたのである。

やがて、年中に進級し、担任が替わると、Eの行動は、ぴたりとおさまり、調和が訪れた。それが何を意味するのか、つぶさにEの行動の変化を捉えた訳ではないが、ただ言えることは、Eがひとつの発達の危機を越えたということである。それはEの心の中だけで起きたことではなく、そこで出会っていたさまざまな人との〝関係〟の中でこそ現れることができ、変わることが出来たEの成長した姿であったと思う。

次に私は、Eの激発ぶりとちょうど似たような行動を示す四歳児に出合うことになる。彼は、二年保育の新入園児として幼稚園の生活を始めた。飛び抜けて身体が大きく腕力もあるRが、まさしく先程のEと同じような行動を表し始めたときには、私には、周りの子どもたちを危険から守ることで精一杯のことも多かった。すでに満五歳を迎えているRは、それまでにかたちづくられてきた人に対する態度、ふるまいの枠も強く、容易には気持ちが通じ合わなかった。Rは自分が大勢のなかの一人であることを理解し、受け入れるまでに非常に時間がかかった。大変な甘えん坊で、保育者の身体にベタベタと触れたがり、とにかく保育者の視線が常に自分に向けられていないと満足できなかった。大人である保育者に、自分の方を向いてもらう為ならば、私の顔をむりやりつかんででも、自分の方へ向けようとした。また、子ども同志でもうまく関係を結ぶことができず、自分のやり方を無理やり相手に押しつけようと力に頼る非常に乱暴な行動が目立った。そして、気に入らないことがあると、ひっくり返って手当たり次第に物を投げつけ、暴れ、泣いた。Eと似て、園生活に慣れるにつれなお一層、激しい行動には拍車がかかっていった。何しろ、身体の大きいRのことである。怒り出したらその勢いは尋常でな

い。その度に私は、自分の身体を張っているような覚悟を自分に課すこととなった。無理に子どもを抑えつけるような関わり方を嫌悪しながらも、実際にはそうせざるを得ない場面も次々とやってきた。だが、三歳のEが相手のときとは違ってだっこすることや抱えて歩くことも難しく、また、周りの子どもたちへの影響力の大きさから考えても、目が離せない緊張の日々が流れた。

Rが何を引き起こすかわからないという心配から気持ちが張り詰めていると私自身の身体も緊張する。笑顔も嘘になる。気持ちも身体もRを受けとめきれずにいる為に、ただでさえ〝自分〟を一杯に抱えて漂うRは私という保育者のもとで安心することができない。そう考えた私はある日、「自然にそうは思えなくてもRをうんと好きになろう」と自分に言い聞かせた。熱く激しく自分をぶつけてくるRを駆り立てている気持ちの背景を探ることに躍起になるよりも、Rのいろいろな行動とは無条件にRを可愛がれるよう意識してみようと思ったのである。このとき、長い長い時間をかけたRとの心の応答が始まった。

こうして振り返ってみると、怒れる子どもの保育者をも揺さぶるような激しい行動の陰には、他者との関係において、震えるように不確かな、頼りない「自己」の姿があったように思う。つまり、彼らから私に向かって放たれたメッセージは、「他でもない、この『わたし』を受け取って欲しい」「『わたし』が『わたし』でいられるよう支えていて欲しい」というものだったのではないか。しかもその『わたし』は、新たな環境、他者との関係において非常に脆く、臆病で神経質な性質を携えている。絶えず、不安で不安定な感情の波に洗われており、岩に弾ける飛沫のように出合う者に体当たりでぶつかっては、粉々に砕け散り、安らうこともできない。この小さな心が安定と調和を見出すには長い時間と道のりを必要とするが、子ども自身がそこを抜け出るために、今このときに出会った者同志として、幾らかでも歩みを共にできるならと切に願い続けていきたいと思う。

（洗足学園大学附属幼稚園）

トポスにおける発達

第 9 回

—環境の探索としての移動—

無藤　隆

歩くことの社会化

子どもはほぼ満一歳前後で歩き始める。初めは、伝い歩いたり、大人に手を取ってもらって歩いたり、独立して数歩を歩むだけだが、すぐに一人でどしどし歩くようになる。体重の移動とそれを支える足の筋肉が発達すれば歩けるのである。それでも、段があれば、上がったり降りたりするのは簡単ではない。走ったり、飛び降りたりするのは、一歳代の子どもにとって大事な発達の目安だろうし、子ども自身も初めはおずおずと、その内喜んですることである。歩いたり走ったりはその意味では一歳代を通して出来るようになる運動である。二歳過ぎておむつが取れる頃に相当自在に歩き走り回れるようになる。

では、歩くことは、その段階で発達は完成し、後は特に変化はないのだろうか。そうではない。「発達」と呼ぶかどうかはともかく、学校に入っても、歩くことや走ることをめぐっての指導がある。例え

ば、行進することがそうだ。朝礼でも運動会などでも整然と行進して入退場することは小学生には難しい。廊下などにも「静かに」とか「走らない」といった注意書きが貼られていて、しょっちゅう先生が注意を与えているのが現状である。速く走ることも決して上手には出来ない。短距離でも長距離でもそれなりの走るフォームやリズムがあるからである。

幼稚園や保育園でも歩くことの指導はないわけではない。保育園の「お散歩」などでは園の外に出ていくために安全上一列になるとか、二列で隣の子と手を繋ぐとか、前の子どもとの間隔を開けないようにすることなどがしつけられる。目的地に着くまでおしゃべりやよそ見をしないようにと注意を与えることもある。幼稚園でも特にクラスでまとまって移動する場合など同じようなしつけがなされる。

そういったことは移動することつまり歩くことのマナーの類で、移動をめぐっての発達とは言えないのではないかと思われるかもしれない。「発達」と呼ぶかどうかは別として、大人なら出来る目的地までの整然とした移動を子どもが出来ないことは確かであろう。学校がそのための社会化の働きを担っていることも明らかだ。

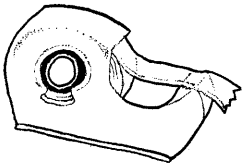
実際、幼稚園などで子どもを見ていると、整然とつまり前を向いて目的となる場所に歩行にふさわしい一定の速度で移動する様子というのはあまりない。のたのた歩いたり、走ったり、スキップしたり、回りをきょろきょろと見回したり、友だちとおしゃべりをしたり追いかけっこをしたり、突然後ろを振り向いたり、遠くの友だちに声を掛けたりする。唐突に駆け出したり、立ち止まったり、ふと目に付いたおもちゃや草や鎖などに触ってみる。しゃがみ込み、寝ころぶ。ぐるっと回って戻ってくる。ちょっとだけ友だちの遊びに入ってまた先に行く。友だちともつれ合い、ときにはおんぶやだっこの真似をする。かと思うと、何かを目指してまっしぐら

に走る。ほとんど一定の移動のパターンはないようだ。

整然とした移動以前の揺れ

なぜ既に歩ける子どもがこのように整然とした移動が難しいのだろうか。単に体を動かす運動という意味では歩いて移動できるはずである。また、必ずしも目標が持てないからではあるまい。目標なしに動いているときはあるにせよ、目標をめざしていても、整然とした移動が難しいからである。

移動することがA地点からB地点に速やかに位置を変えることだというのはおそらく大人の見方である。子どもにとってはその移動の時間自体が重要になっている。目指す先にほしいものがある場合など、途中のものを無視するかもしれないが、その移動の時間が長かったり、途中で面白いものがあれば気が変わるかもしれない。また、特に目標がなく何となく動き回ったり何か面白そうなものを探して動く場合もある。移動の動き自体を楽しむことさえある。走ったりスキップしたり自体が楽しいのである。



何であれ、目標に向けて整然と進むように小さな子どもは出来ていない。目標を頭の中に描いて保持し続けることが難しいのだろうし、保持しているにしても回りに目に付くことの影響が強い。いやむしろ、移動すること自体が何か先にあるものを目指すことと共に回りにあるものへの関わりであり、適応の過程であると見なすことが出来る。いかに既に歩けるとは言え、例えば、ちょっとした段を越えることや曲がること、一回りすることなどがまだなお新鮮であるらしい。その身体的動きとそれに伴う回りの見え方が変わることが面白いのではないか。

回りにある光景を眺めることも重要らしい。園などでは仲良しの子がいるかと探したり、何か面白い遊びをやっていないかと眺め回ったり、目新しいことが起こっていないかを見て回ったりを子どもがよくしている。自分の遊びに集中している時間もあるが、そうではなく、ぶらぶらと歩き回り、何かを探しているらしいこともある。ただ何をするともなく、保育室や庭の回りを一周してくることもある。その途中で気の付いたことがあると、ちょっと見てみて、いつの間にかそこにいついて深入りしていることもある。

道の様子に適応したり、回りを眺めたりしているようだが、それで説明できるのでもない、よく分からないフラフラした動きを子どもがすることも多い。単なるランダムな動きなのかもしれない。「揺れ」とでも言えるようなでたらめみたいな動き方である。自分の体をちゃんとコントロールできないからかもしれないが、それ以上に、子どもの動きが揺れを本来的に含んでいて、揺れがあるからこそ生き生きとしているとさえ感じられる。

そう考えると、整然とした移動や行進はそういった揺れやら眺めることやらを排除して、無理に子どもを一定の型に押し込めるとさえ見えてくる。大人が通勤の途上に込んだ駅の構内を移動するときには、人の流れに沿いながら、黙々と移動せざるを得ない。そこにはほとんど喜びらしきものはない。耐えているのである。耐えることを学び、回りに迷惑を掛けない行動の仕方を学ぶ必要があることは確かだが、その必要がないところでは、子どもは（大人も）もっと生き生きと動いたらよいはずである。

実はもっと正確に言えば、大人の整然として見える移動の中にも動きの喜びは派生しうる。誰かに強いられるのではなく、自分のペースでただ歩くことは大人にとってあまりないから、その喜びを忘れているかもしれないのである。

少なくとも、子どもを社会化し秩序ある移動の仕

方を教える際に、生き生きとした動きをそこに許容しつつ、より整頓された方向へと持っていく援助の仕方が求められる。子どもが移動に際していかなる動きを示して、何に喜びを見出しているのか。大人はその喜びをつぶすことなく、いかにして世の中の秩序との両立を可能にしていくのか。これが重要な検討課題である。

移動するトポス

子どもは移動する際に単にまっすぐ目標に向けて動くのではない。環境との関わりにおいてまた単に揺れることで様々な動きを示すのである。このことは、トポスという観点からは何を意味するのだろうか。一つは、移動するための空間があるということである。道や廊下はそのために初めから作られた空間であり、移動するのに都合がよいように、移動の方向に沿って細長い形を取っている。その上、回りの場所へのまた回りの場所からの出入りが制約され、ときに景観も制限されていることが多い。学校の廊下が典型的であり、掲示物は見られるし、上の方の階であれば窓から校外の景色が見えたりもするが、大体は見渡しても面白いものは見えない。教室ものぞけないのが普通だ。幼稚園の場合には必ずしもそうではない。廊下も窓から外がよく見えたり、出入り口の開放部分が大きかったり、いくつもあったりする。外廊下を使っているところも多く、庭や保育室との出入りが容易であるだけでなく、互いに見えるし、声を掛けられる。広めの廊下などだとその場所で留まって遊ぶことが許されている場合も多い。移動のための空間がそれだけの機能で単純化されておらず、回りを見るという機能やそこで遊ぶ機能を兼ね備えているのである。

子どもが見出す独自の「道」がある。例えば、公園や林の中の藪の下の「道」とか、家と塀の間のわずかな隙間を通る「道」、まっすぐ行けるのに回っていく場合、障害をわざと乗り越える場合などであ

る。どれも確かに通過するのであるが、しかし通過自体が困難を抱えている。不自由さを含みながら、それを乗り越えるところが面白いのかもしれない。思いがけない変化を伴うので、その意外性が好まれるということもありそうだ。移動する空間が移動ということ自体を越えて、独自の個性を持ち始めるのである。

移動する空間を含みつつ、そのトポス全体が移動により活性化するということがある。面白いことがないかと移動しつつ探したり、移動している子どもと遊んでいる子どもの間に交流が生じたりするのがそれである。そもそも、一様な空間から成り立つのでない限り、トポスとしての空間はさらにその下位となる空間に区切られており、だが、その区切りは緩やかであったり、柔軟であったりするのである。さらに、区切り自体が独自の特質を持った空間にもなり、その一つが移動する空間とここで呼んでいるものである。移動することがトポス全体をいかにして結びつけるのか、またトポスをいかにして複雑で多様なものにするのかがここで問われている。移動することがそれ自体として独立した動きをなしたところで、逆に、その移動しつつあるときにその動きが他の空間での動きとの関連を持つように、空間は構成されていかねばならない。それがトポスの意味を豊かにする一つの方策となるのである。

歩きつつ環境を探索する－母子の事例の検討

我々の研究室では（出口加奈子「幼児期前期の子どもの道を歩く行動における環境の探索」平成五年度お茶の水女子大学家政学研究科児童学専攻修士論文）、以上のような問題意識の下で、一～三歳の子どもとその母親が「散歩」（実際には公園に行くとか買い物に行く途中）している様子を観察し、子どもの動きを記録した。その要点を追いながら、小さい子どもの歩き方がいかに環境との関わりを実現する行為であるかを見てみよう。

ここでは、一歳半から三歳終わりまでの六十組の母子について、普段外出する道に観察者が付いて歩き、ビデオの撮影をした（ビデオカメラを腰につけてビューファインダーを時々のぞき込む形にして、観察者はフィールドノートを付けることにした）。母親の働きかけの言葉と、子どもの動きを分析した。子どもの動きとしては、回りに関わる行動に注目した。特に、回りのものに注視する、触れる、提示・指さし・言語化などである。また、登ったり飛び降りたりなどの全身的行動も記録した。

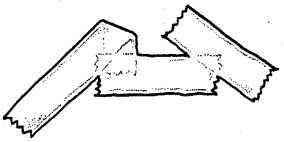
歩いているときにどのようなものを探索したのだろうか。生物（動物・鳥・昆虫）、植物、乗り物、人、建物、置物や看板・標示等、棚、塀、段など、回りに見られる多くのものに関心が寄せられている。年齢との対応では、乗り物との関わりは年齢と共に下がり、看板や公園等については年齢と共に上がっている。

各々にどのような行動を取るのだろうか。乗り物については、見る行動が四分の三を占める。例えば、駐車中の車や走る車を歩道から見るのである。触れる行動は一割程に過ぎない。駐車中の車のそばによって触るのである。同様に、音から関心を抱く場合が一割ある。

例　二十三か月の女児

バイクが音を立てて過ぎていった後、「ブーッて行ったよ。ブーッて。」と力一杯声を出しながら進んでいく。

動物に対してはどうだろうか。やはり見る行動が多く、八割近くを占める。近くに寄って見ることがその半数以上である。ただ、事例を見ると、子どもの表情が大きく変わり、歓声を上げるのも多い対象である。表情はポジティブなのもネガティブなのもあ



る。

例　二十八か月の男児

「あっ、ゴンちゃんだ、ゴンちゃんだ。」と言って、立ち止まり、遠巻きにじっと見て、母のそばにピッタリと寄り添う。「ゴンちゃん、やだ。ゴンちゃんに食べられる。」とつぶやく。すると、母が「ゴンちゃんに食べられる？　ゴンちゃん怖くないよ。」と言う。犬が通り過ぎる間、母と子は立ち止まったままでいる。「ゴンちゃん、行ったから、手離していい？」と母が言い、手を離して、母子共々歩き出す。

例　二十一か月の女児

よその庭に猫がいるのが柵の隙間から見えて、母が指さして、「あっ、○○ちゃん。あっ、ニャンニャン！　ニャンニャン！」と言う。子がのぞいて、「ニャー。ニャンニャンね。ニャーね。」と興奮した様子で言う。「ニャーニャーニャーニャン。」と母の方を向いて笑う。「ニャーニャーいたね。」と母が応ずる。子は「ニャンニャンニャンニャー」としばらく言いながら歩く。指でヒゲを表しながら「ニャーニャーね。」と言う。

花や草になると、触る場合が増え、花は四割、草では八割の場合で触っている。

例　十八か月の女児

子どもがエノコロ草を引き抜こうとする。母が「これこれ」とエノコロ草を摘んで、「クチュクチュの草。コチョコチョで……いいなコチョコチョ」と言う。子が「クチュクチュ」と言いながら、草を両手で持って歩き出す。母が「○○ちゃん、自分でやってごらん。」と促す。子がエノコロ草を自分の頬にあてる。母「そう。」。子が「クチョクチョ」として笑う。母が「ママやって、ママ」と言う。子が母を草でくすぐる。「あーっ」と母は笑い、「くすぐったーい。」と足踏みする。続いて母は「じゃ、（クリーニング屋の）おばさんにもやってあげようか。もうすぐだよ。見えてきたぞー。」と

言う。

標示や標識は踏んで歩くとか飛び越える、登るなどの行動が九割を占める。

例　四十二か月の男児

子「ピョーン、ピョーン」と両足を揃えて跳びはねる。「ウサギだよ。跳ねるよ。ウーン（体を思い切りそらして）、ピョーン」と両足跳びをする。「あそこ（マンホール）の中にピョーン」と言って両足跳びでマンホールの蓋の上にのる。「あそこ（停止線）へピョーン」と停止線を跳び越える。「すごいでしょ」と母に言う。母「すごい。道路だって、ピョン、ピョン、ピョーン（片足跳びとスキップ）、ウサギになるんだよね。」と言う。

このように、子どもは母親と共に歩きながら、回りにあるものに興味を示し、関わる。親の側もそれを助けている。しかしまた、親の側はまったく道で遊んでいるだけでなく、しばしば目的地を示し（「……へ行こう」と言う）、さらに先にある場やものや活動についてのやり取りを行う。途中の段階でのものに言及して移動を誘うこともある。

例　先ほどと同じ十八か月の女児

母「もうすぐ。パパのワイシャツ、どうぞするんでしょ、おばさんに。どこだっけ？」。子が「ここ」と先を指さす。母が「そうだね、あっちね。よーし、もうちょっとだよ。」と励ます。

移動することは、幼い子どもにとって、自明なものとして成立していない。目の前のものに関わる活動としてまず成り立ち、その後、徐々に先にあるものとの関わりを想起し予期することを通して、移動としての働きを担うようになるのである。その場合でも、移動中に見られる環境の事物との関わりを失うことはないのである。

（お茶の水女子大学）

ある日の育児日記から

(68)

佐藤　和代

圭の小学校で運動会がありました。小学校の運動会ってどんなのかな、と興味しんしん。おべんとうを作って、家族で出かけていきました。

昨年の保育園の運動会では、圭は年長クラスでしたから、出番も多くて、目立つ存在。さすが年長さん、大きいね、しっかりしているね、あんなこともできるんだね…と言われるスターだったのに、今年はなんて小さく見えること！　やっぱりまだまだかわいい一年生なのね。六年生なんて体格はすっかり大人だったりしますから、差はもう歴然。いろいろな競技が、どれも、二年生だとこれくらい、三年生だとあれくらい出来るようになる、という見本を見ているようでした。

そしてお昼。持ってきたシートを広げて、おべんとうを並べて。ふと回りを見ると、あらら？　おべんとう広げている人がほとんどいない。同じ一年生の家族がちらほら、すみっこで食べているだけです（子どもたちは教室で給食を食べています）。うーん、我が家は小学校の運動会というものを誤解してたかな。そういえば、朝から見物人が少ない気はしていた。親は適当に見に来て、昼には家へ帰るものなの？　競技は面白かったけど、何か物足りないものを残して、そそくさと帰った運動会でした。

1年生のダンスは、ぜんぜんそろってないのがかわいい。

保育の窓(3)

幼稚園の現状と諸問題

原口　純子

はじめに

先般某市の市議会の一般質問に、公立幼稚園の保育の質についての質問がなされました。市は設置者として、どのように指導しているかを問い正しているのです。厳しい指摘でありますが、幼稚園の保育の質について世間の注意を喚起する意味で、とても重要なことと思いました。子どもが行っている幼稚園の保育の質について疑問を感じた父母が、園に交渉してもラチがあかず、文教委員の議員に相談したいきさつがあるのです。父母が保育のどような状況に疑問を感じたのか、園がどのように対応したのかなどの詳しい経緯抜きに、一概に物は言えないのですが、双方納得の行かない事態になったことは残念なことです。

ところで、幼稚園の保育の質は良くなっているでしょうか（ここでは一応公立幼稚園を対象に考えます）。一言でいうと非常に大きなバラツキがあると

いうことではないかと思います。保育の質の問題は一見園長の指導力や個々の保育者の努力如何にかかるように見えますが、それだけでは済まされない、根本は行政に関わる、根の深い問題なのです。

行政の関わり

教諭の身分

もとより幼稚園の教諭は学校教育法第一条により小中学校の先生と同様教育職であるべきなのです。またそのことは同時に教育公務員特例法によってカバーされるはずなのです。ですから研修と修養とを義務づけられているのです。けれども実態はどうでしょうか。

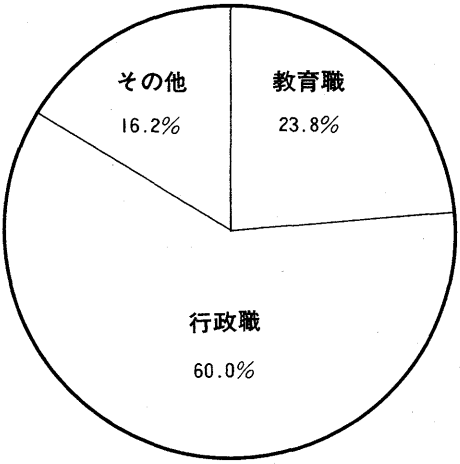
先に行われた文部省主催の研修会で、全国から集まった幼稚園の園長、教頭の研修会のグループ十九人のうち、身分が教育職でかつ教育公務員特例法が適用されているのは、国立大学の付属以外ではたった一名だけでした。その他は、概ね行政職が適用されているのです。参加者の実態は次のとおりでした。

- 身分が教育職で研修も認められ、給与も小中学校の給与表が適用され、教職調整四パーセントの加算がなされている。
- 身分は行政職であるが、研修は認められ、研修費ももらっている。
- 給与は市町村独自の幼稚園教諭給与表であるが、身分は行政職で研修は認められないし、研修費もない。
- 身分も給与も行政職で、保育所や役所内部との異動がある。

など教諭とはいえその身分も立場も給与体系も自治体によって実に様々であることがわかります。このことは、全国レベルでの調査からも明らかで、「全国国公立幼稚園の現状と諸問題」の調査報告書によると、教員の給与の支給が小中学校教職員給与表の適用は二十三・八パーセント　行政職が六十・

○パーセント　その他（幼稚園教員のための給与表を含む）十六・二パーセントとなっており、大方の幼稚園の先生は教育職とは認められず、行政職としての身分を与えられていることが分かります。

役所の中においてすら認識があいまいで、保育所と幼稚園の違いが分からず、みんな短大を出ているのだから保母で、行政職一本でよい、と考えている行政官がいるのではないでしょうか。この発想からは、幼児教育の大切さも、教諭の研修の必要性も義務もまして、研修費を出すなどということは、考えられないことかも知れません。「あなたたちは先生かも知れないけど、市役所の職員なんだから、市役所職員の服務規定に従ってもらいます」「研修は県外の幼稚園の視察ではなく、市が決めたものに出てもらいます」といって、ごみ処理場の見学などばかりをさせられていては、幼児教育は良くならないのです。市の職員ではあるが、教育公務員であることを認めていただかないと困るのです。教諭に教育職としての身分を与え、相応しい待遇をしないことは、意欲をそぎ、研修の義務もなく、そのうち家に仕事を持ち帰らない気楽さを身につけ、保育者は子守化してしまうのです。園長ががんばって研修に出したいと思っても、教諭に年休を取って、参加費用を払って行きなさいとは命令できないのです。



図A　幼稚園教諭の身分

幼稚園教諭に教育公務員特例法を適用し、研修の義務を時間と研修費で保証し、プライドを持たせて幼児教育に誠心努力してもらうほうが、これからの市民を育てるという視野からどれほど市のためになるか計り知れないのです。

採用

「教育は人なり」といわれるとおり、保育の質の七割方は採用された人の質によります。「教諭の力量は園長の指導による、園長はしっかり指導するように」と委員会は言われますが、微力な園長の指導力では育てきれず、現場は苦心惨憺の割に成果があがらないのです。

採用時、プロの目からすれば、面接一つで、大概の適性は見ることができますが、市町村の採用は適性とは関係ないレベルで決まることが多いのです。行政がもし本気で良い幼児教育をしたいと思うならば、保育の専門家による試験を実施していただきたいものです。

園長

学校教育法によりますと、園長のしごとは「園務をつかさどり、所属職員を監督する」ということであり、園長は教職員免許をもっていればよく、幼稚園教諭の資格がいるわけでも、経験が必要でもないのです。又、専任でない園長（兼任）を置いてよいことになっています。何故幼稚園は兼任でよいのでしょうか？　独立した教育の組織にその責任者を兼任にするということは、やはり独り立ちした組織として認めていないことにつながるように思います。そこには幼稚園が、明治以来女性の職場として位置づけられ、管理職として女性を登用せず、兼任の男性を置いた歴史に始まると思われます。

園長の種類

・専任園長1定年退職前の専任園長（幼稚園の教諭の資格を持った女性が多い）

2定年退職後の再就職園長（退職校長等が多く専任とはいえ、週三日の嘱託園

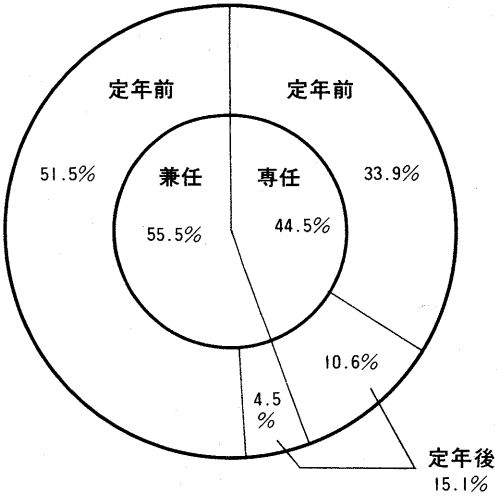
長もある）

・兼任園長3幼稚園を二園又は三園兼任する園長

4小学校との兼任園長

5その他の兼任園長（大学、公民館、中学校等）

図Bから読み取れるとおり、専任と兼任では依然として兼任が多く、専任でも定年前の園長は三十三・九パーセント、全体の三分の一に過ぎないのです。定年前の専任園長はほぼ女性と推察されます。小学校との兼任の園長はそれなりに良い点はあるのですが、やはり片手間仕事になります。自分で保育を行い現場を知りつくした人が園長になることが相応しいことです。小学校の校長に女性が登用されるようになって、幼稚園の女性の園長も増えてきています。しかし、幼稚園は義務教育の小中学校のように県単位の人事ではないため（県によっては広域で小学校と人事交流のあるところもある）、一村一園などのところでは、人事が滞りむずかしい点もわかります。



図B　園長の種類

ともあれ、現場を知っている園長が、以前に比べれば増加の傾向にあることは良いことです。しかし、依然として、幼稚園は定年退職後の校長の格好な再就職の場として、便利にされている傾向がないとはいえないのです。

国立大学付属の幼稚園長に幼児教育の専門家が少ない事は非常に残念なことです。かつて、倉橋惣三が東京女子高等師範学校附属幼稚園の主事につき、思索と実践の場をもって日本の幼児教育を大きく進展させたように、幼稚園が幼児教育の専門家を園長に持てば、もっと様々な考えや意見がでて、活性化されるのではないでしょうか。園長会のメンバーが皆、幼児教育とは関係のない専門分野の人々の集まりになるというのも残念なことです。日本の幼児教育がなかなか前進できないのは、園経営の担い手を専門外の兼任園長で済ませていることにもよるのではないかと筆者は思います。

幼稚園を指導する

幼稚園専任の指導主事の増員を

長年現場にあった者として、保育現場の分かるよい指導者が少ないことはやはり悩みの種でした。大都市では、公立教育研究所や大学等があり、幼児教育の専門家の指導を仰ぐことができますが、地方の小さな市町村では人材も不足しており、本当に保育を指導していただける機会は少ないのです。県の教育庁に幼稚園の現場のわかる指導主事は一人しかおらず、全県下をカバーするとなると、三年に一日指導をいただける程度なのです。地方教育事務所や市の教育委員会にも小中学校の指導主事はいるのですが、幼稚園専門の指導主事をおいている所は、私の身近にはほとんどありませんでした。三月まで中学校の理科の先生をしていた方が四月から地方教育事務所の幼稚園担当の指導主事になって、幼稚園の訪問指導に行くのですから、任務に当たられた先生も気の毒なことですし、迎える側も環境整備や、自分の保育を見直す機会にはなるのですが、実質的にはほとんど指導を仰ぐことはできないのです。

小中学校の先生と幼稚園の先生では、基本になる指導観に大きなへだたりがあるように思われます。生活科ができて、やや溝を埋めているかに見えます

が、相互の理解は程遠いものを感じます。幼稚園専門の指導者が是非ほしいのです。

教育要領が改訂されてもその真意がなかなか伝わらないのも、現場が自己流の解釈でやりすごすのも良い指導者にめぐまれない事情もあると思われます。

園長研修

専任園長が、小中学校の校長のように、勉強をして登用試験を受けてなる地域もありますが、小さな市町村では、年功序列でなる場合が多いのです。狭い地域の中で、現場のみを三十年ぐらい歩いて来た場合よほど努力して視野を広める経験と機会を持たなければなりません。

保育についてビジョンを持ち、施設設備環境を整え、教諭をしっかり育てられる力を持たなければ形だけ専任の園長をおいても意味はないのです。

A園長先生は若い時からレクリエーション協会のメンバーで、土曜日の午後に自主的に協会の研修に参加していました。ゲームやフォークダンスにかけては指導者としての実力を持ち、園内で幼児と遊ぶことはもとより、地区の研修会や講習会の指導に当たられます。現場で経験を重ねる者が、現場でしか得られない理論や実技の指導力をもって、保育理論ならB園長先生、造形活動についてはC園長先生というように力をつけ、相互研修ができるようになれば、みんなが指導主事です。

幼児教育に対して、行政のより深い理解と協力をお願いすると共に、まず自分の足元を踏み固める必要がありそうです。

（洗足学園短期大学）

参考資料

統計資料は『平成七年度　全国国公立幼稚園の現状と諸問題』（全国国公立幼稚園長会　平成七年度）を使わせていただきました。

お昼寝中の研修会

永野むつみ

「私たちの創った人形劇を観てください」

ときどきこういう電話をいただく。この日は、公立保育園の主任保母さんから。

「全員参加の研修にしたいので、昼の時間に来てください」

「あの……子どもたちは？」と私。

「昼寝中ですし、園長と給食の先生が保育にあたってくれますから」

「喜んで」

昼寝中の保育園は静かだ。つい私も、抜き足、差し足。声を殺したあいさつもそこそこに、会場のプレイルームへ。ところが、ドアを開けるとそこは別世界。張り詰めた空気の中に華やぎがある。先生たちの圧倒的なエネルギーに私は息をのむ。どぎまぎしている間に「研修会」は始まる。

にわか仕立ての舞台で

衝立が立っている。高さ百二十、間口百八十セン

チメートルほどか。重ねた机を両側に置き、間に物干し竿を渡してある。目隠しにカーテンがかけられている。フックもそのままに、ついさっきまでカーテンとして使われていた様子がうかがえ、思わず口元がほどけてしまう。

若い先生が登場し、始まりのあいさつ。観客は私ひとり。

この日の演目は、中川李枝子原作の『そらいろのたね』。演目選びや人形、舞台のつくり方など〝最初に出合った作品〟の影響をとても感じる。どの劇団のどの作品に触発されたのかよくわかる場合が多い。

「いかがでしたか」

二十分くらいの人形劇が終わると、今度は皆の目が私に向けられる。私は言葉に詰まる。ニコニコしながら胸の内は、この依頼を受けたことを後悔し始めている。感想や意見は山ほどある。しかし、自分のスタンスが決まらないのだ。私は今ここで何を言うべきなのか。もち時間は一時間半。私にどんな「助言」を求めますか、と逆にこちらから質問がしたくなる。

一生懸命さには胸をつかれる。見よう見真似で作りましたという人形。膝立ちか、アヒル歩きで移動するしかない低めの衝立。万年腰痛気味の先生には辛いだろうな。せめて衝立を百五十センチメートルくらいまで上げると楽なのにな。しかしこれは子どもの視線を考慮したものなのだろう。そして昼休み返上の研修会。本来なら園児の昼寝の時間は先生にとってもほっと息のつける時間のはず。たとえ保育記録や連絡ノート記述等の雑務はあったとしても。

カット　山根裕子

ここまでくるのにどれだけの時間と労力が削かれたのか。それらを思うと、ただただ頭が下がり「助言」など口幅ったい気がしてくる。もともとこうあるべきというものはない。好きなようにやって構わない。

「皆さんとても熱心で、子どもたちにはきっとそれが伝わるでしょう。ボクたちの先生が、ボクたちのために一生懸命演ってくれている。その事実が子どもたちをどんなにか喜ばせるでしょう」

こう申し上げるのが精一杯。自分の内の迷いをふり切りながら「これで良いのです」と言い切る。専門家ではないのだから、演っている人たちが楽しければそれで良いのだ。この想いにウソはない。しかし、しかしである。先生方は幼児保育のプロではないのか、という想いと、演っていて本当に楽しいのだろうかという疑問が、やはり頭をもたげてくる。彼らもこれで良いのかという想いがあるからこそ私を招いてくれたのに違いない。やはり感じたことは伝えなくてはならない。口ににがく、耳に障っても。

どうしても気になること

一つはセリフまわし、妙な抑揚がつく。芝居がかった物言いとでも言おうか。あるいはヘタな声優風。申し合わせたようにみな短調で、単調だ。聞いているこちらの方が恥ずかしくなるほどベタつく。

声色を無理に作っているせいかも知れない。でもどうして声を作るのか。「人形」劇だからか。人形には普通じゃない声が似合うというのか。あるいは誰かにそうするものだと教えられたのか。それとも園児に先生の声だと悟られないようにか。節をつけて言いたくなるのは、原作の文体に捉われているせいだろうか。

ちなみに絵本の「　」付きの文章は、そのままではセリフ、つまり話し言葉として使えない場合がある。同時にそれ以外の文章を単純に「語り」として

使ってしまうと、人形劇というより説明の多い立体紙芝居風な仕上がりになりかねない。

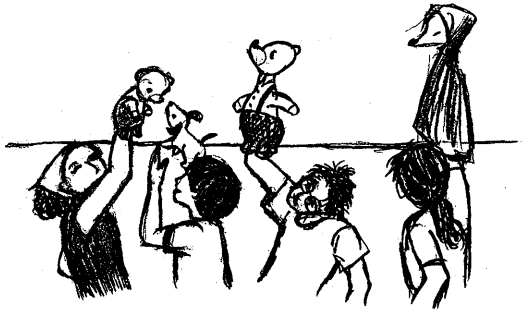
いずれにしても理由を問うと、とりたてて意識していないと言う。それならば私は、できるだけ普通に、さっぱりとしゃべって欲しいと思う。人形がすでに形象として役を表現しているのだから、自分が一番楽に話せる声でしゃべったら良い。その方がはるかに個性的で魅力的で表現的に違いない。何よりも、何を言いたいのか相手役にも、観客にもきちんと届く。会話が成立する。このことが最も大切なことだと私は思う。園児と毎日向き合っている先生方ならできるはず、先生は役者ではないがしゃべりのプロなのだから。

もう一つの気になること

これは止むを得ないことでもあるが、人形の動きがうけ入れがたい。哀しくさえなってくる。一言で言えば、どうしてあんなに無駄にガチャガチャ動く（動かす）のだろうか。原因の一つには人形の遣いにくさがある。もっと気楽に演るためには、身近に使い易い人形があること。劇人形を貸し出す図書館のようなものがあれば良いのだろうか。

もう一つ考えられるのは、やはり先生自身が優れた人形劇に出合ってないということではないか。あるいは観ていて観ていないということ。どう動いたらいいのか判らないというのが本音かも知れない。

「劇」は嫌だけど、人形劇ならという言い方もよく聞く。観客に見えるのが人形で、自分ではないとい



う人形劇の特性の功罪をそこにみる。功は、私にもできそうと思わせるとっつき易さであり、罪は演技術の軽視、あるいは無責任、無関心を生むところ。

人形劇にとって、人形の動きこそが、その表現の要であるにもかかわらず！

技術も必要なのだ

人形劇の演技術の習得は、楽器のそれと似ている。ピアノを週に一回、二時間ずつ習い始めて、十回で発表会を開くだろうか。ところが人形劇の「講習会」の場合はあるのだ。十回の間に人形作りも入っていたりするからさらにおどろく。確かに「劇」は観客なしには存在しないし、即興も得意とするところだ。ピアノの場合も、打楽器的な使い方もできるし、指一本での演奏も可能だろう。音楽を楽しむ心、センスがあれば技術の習得をまたず、ある種の感動は伝えられるだろう。ところが一方人形操作ほど、演技者のつもりがそうは見えないという世界もないのではないか。その点ではケーナとか尺八とか、容易に音が出ない楽器に似ているかも知れない。

一番おいしいところを

誰かに「普通に」歩いてもらう。もちろん人形で。観ている先生方に「いかがですか」と投げかける。「いいですね」とほとんどの先生が応える。「本当ですか」と、少し語気を荒げて問い直す。私の気配に押されたのか、何人かが「ええと、そうですね……」と考え始める。業を煮やして「私にはどうしてもこのように歩いているとしか思えません」と、その人形の動きを、私の体で真似てみせる。どうみても普通ではない。皆笑い、そしてようやく気がつく。普通に歩いているように見える動きと、そうは

見えない動きがあるということを。人形も普通に歩くことができるのだ！　普通に歩くことができるから「トボトボ歩くこと」も「酔っ払って歩くこと」も「いそいそ歩くこと」もできる。つまり人形の動きだけで哀しみや喜びを〝表現〟できるのだ。くれぐれも、わずかな人形の動きと、観客の想像力をあなどってはいけない。演技者の内面を、本人も気づかないうちに観客に伝えてしまったりもするのだから。同時に、どうみても演技者のつもりが、そうは見えないということもある。これらのことに気を配りながら人形を動かすおもしろさ、つまり人形で演じるおもしろさとむずかしさをぜひ味わって欲しい。これこそが他では味わえない人形劇ならではの楽しさの中核だと私は思う。どうせわざわざ時間と労力をかけて取り組むのなら一番おいしいところに食らいついた方が絶対おもしろい。できるならば〝発表〟を急がずに。

反省と心配

「人形劇ってずい分奥深いものだったんですね」と参加者。

「あれから先生たちは頭を抱えちゃって」、と園長の後日談。私は先生方のやる気をそいでしまったのだろうか。何でもいいのです、やりたいようにやれば、と励ましつつ、いくつかの具体的な「助言」に留めておけば良かったのだろうか。つい夢中になって先を急いでしまった私は、保育現場にうとい、ただの人形バカなのだろうか。この原稿を書きながらも、私の心は揺れている。

（人形劇団　ひぼぼたあむ）

編集後記

〈緑蔭図書紹介〉を五人の先生にお願いしました。〝この夏こそ本を読もう〟と、計画していらっしゃる方の参考になればうれしいです。

＊

夏休みの終わりの一日を三歳になったばかりの甥のAと過ごした。ことばを使えるようになり始めた「三歳」のAは新鮮だ。この日、Aは年長のLやNと遊んだことで「まわる」いうことばのレパートリーを広げる体験をしたように思われた。

まず、LやNは持ってきたおもちゃを飛ばし始めた。Lはふくらませた風船をセットし手を放す。「ビャ～」という音と共に天井近くに舞い上がりプロペラがあたりを飛びまわる。それは「舞う」ことに連なる「まわる」とでも言えようか。Aはそれにあわせて動きまわる。次に、Lは風船の代わりに自分がそれを口にくわえ鳴らしながら、廊下へ出て部屋の周りを行進し始めた。おもしろがってNが、その後にAが続く。Aは（部屋の）周りを「（歩いて）まわる」。やがて、三人は疲れたのか部屋の中央に座り込む。Lはまた風船をつけて天井にむけて飛ばす。Nも自分のプロペラを飛ばす。すると、何も持たないAは、突然「まわる、まわる」と言いながら自分の身体を軸にしてまわり始めた。

それは、私の目には、今日新しく体験した「まわる」を自分のなじみの「まわる」のレパートリーに組み込んだ瞬間に思われた。（A）

幼児の教育

第九十五巻　第八号

（一九九六年八月号）

定価四五〇円（本体四三七円）

発行　平成八年八月一日

編集兼発行人　田代和美

発行所　日本幼稚園協会

〒112東京都文京区大塚二―一―一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所　図書印刷株式会社

〒108東京都港区三田五―一二―一

発売所　株式会社　フレーベル館

〒113東京都文京区本駒込

六―一四―九

☎〇三―五三九五―六六一三（営業）

☎〇三―五三九五―六六〇四（編集）

振替　〇〇一九〇―二―一九六四〇

☆本誌ご購読のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

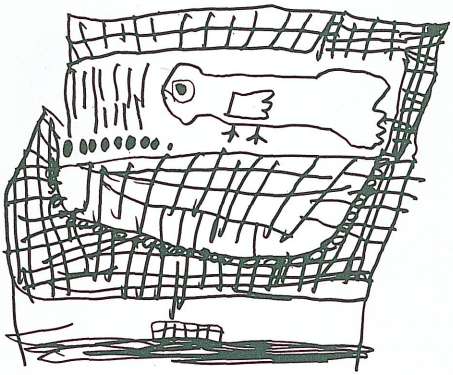
☆万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

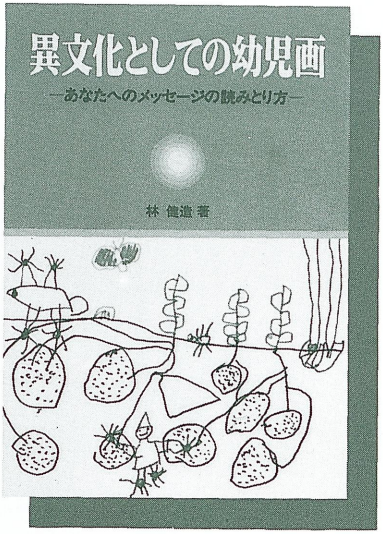
異文化としての幼児画

―あなたへのメッセージの読みとり方―

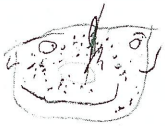
幼児の絵は特別の意味をもっています。それはあなたへのメッセージでもあります。幼児の表現を読み取ることが大切です。それを理解することによって適切な援助の仕方がわかってきます。

新刊





- 幼児の生きた造形表現がわかります。
- 発達による絵の読み取り方がわかります。
- 実際の造形表現の援助の仕方がわかります。
- 現職の園長としての保育譚（はなし）を楽しみながら保育の心が身についていきます。



林　健造・著

A５判・160頁・定価1,500円（本体1,456円）

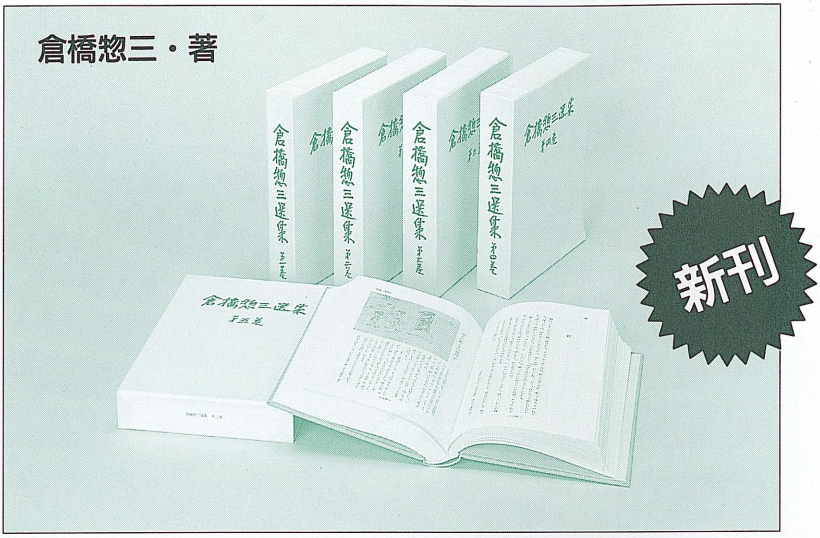
キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

倉橋惣三選集（第五巻）

上製本ケース付き　B６変形判　512頁　定価3,500円（本体3,398円）

第五巻は、今まで単行本に収載されなかった雑誌への寄稿を集めた。その執筆活動は広く、児童教育、発達心理学、教師論、家庭教育、児童文化、そして随想、絵本など多岐にわたる。倉橋惣三の現代につながる先駆的教育論と、倉橋の全体像が把握できる一巻である。



わが国の幼児教育の理論を確立した倉橋惣三の教育論・随筆などを集大成した定本です。今でも保育界においては読まれ、語り継がれて保育者にとっては座右の書。

①幼稚園真諦・子供讃歌・フレーベル	定価3,000円	（本体2,913円）
②幼稚園雑草	定価3,000円	（本体2,913円）
③育ての心・就学前の教育他	定価3,000円	（本体2,913円）
④保育案他	定価3,000円	（本体2,913円）

上製本各巻ケース付き　B６判　416〜472頁

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。